



2009.1.9 No.9

1. 第 11 回セミナーのお知らせ
2. 第 10 回セミナーの記録

山口市吉田 1677-1 時間学研究所

<http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp>

(最新の告知は上記ホームページをご覧ください)



第 11 回セミナーのお知らせ

下記の日程で、時間学セミナーを開催いたします。今回は小串キャンパスにて、時間学研究所第 2 研究グループを中心に、三つのセッションが行なわれます。みなさま、ふるってご参加ください。

第 11 回 時間学セミナー「環境変遷と生物に刻まれる時間」

日時：2009 年 2 月 6 日（金）16:00～18:30

場所：山口大学医学部霜仁会館 3 階

無料送迎バス運行：吉田車庫前 15:00 発（吉田⇄小串）

要旨：

生物にとって時間とは何かを物質からなる生命体という観点から理解する。生命現象において、体内時計のような繰り返す可逆的時間と発生や進化に代表される不可逆的時間がある。それらを統合的に理解できる基礎の構築を目指す。具体的には、生物個体の時間について、個体発生、老化、リズム、刺激応答をモデル生物で解析する。さらに、古生物学や進化生物学の観点から進化過程の時間を解析し、それらを総合的に理解することを試みる。

【プログラムの詳細は次ページをご覧ください】

プログラム:

はじめに ◆グループリーダー 中井 彰

セッション I. リズムと応答 ◇座長 大和田祐二

- ・藤本充章 熱ショック転写因子群による遺伝子発現制御
- ・川道穂津美 血管異常収縮シグナル伝達のリアルタイム・ナノ可視化解析
- ・原田 由美子 ツメガエル発生過程における概日リズム制御機構

セッション II. 発生と老化 ◇座長 岩尾康宏

- ・大和田祐二 FABP 分子群の脳における時間的空間的局在の意義について
- ・上野 秀一 透明化割球が見せてくれる初期胚の細胞内変化
- ・村上柳太郎 ショウジョウバエ胚後腸における遺伝子発現

セッション III. 進化と古生物学 ◇座長 宮川 勇

- ・宮川 勇 酵母ミトコンドリア核様体タンパク質の機能と多様性
- ・鎌田祥仁 見島沖における現世放散虫の観察
- ・藤島政博 細胞内共生の成立機構と真核細胞の進化

おわりに ◆時間学研究所長 辻 正二



第 10 回セミナーの記録

昨年 12 月 20 日に山口大学吉田キャンパスにて、第 10 回の時間学セミナーが開催されました。こちらは時間学研究所第 3 研究グループを中心に行われたものです。セミナーの記録として、講演者の方々にご寄稿頂いた発表概要を、下記に掲載いたします。

概要 1. 古荘真敬(人文学部准教授:西欧哲学)「時間と感情」

「橘や いつの野中の ほととぎす」という句がある。私が花の香を嗅ぎ、鳥の囀りを聞いているのはたしかに「今ここ」における出来事であるのに、その「今ここ」に、これと同じ香を嗅ぎ同じ囀りを聞いた「かつて、どこか」の記憶が不意に重なってきた、といったことであろうか。或いは、現に知覚されているのは花の香のみであるのだが、その香りに触発されて、今は聞こえるはずのない「いつの野中の」鳥の声の記憶が幻のようによみがえってきた、とでもいうのであろうか。その場合、「いつの野中」とは、私自身の体験した過去における場所であるのだろうか、或いはそれとも、古歌に記憶された歴史のなかの場所とでもいうべき処であるのだろうか。

いずれにせよ、私たちの「記憶」と「知覚」の協働に媒介されて「過去」と「現在」とが重なりあう、こうした重層的な「今ここ」の経験は、私たちの感情生活のありようにとって本質的な意味をもっていると思われる。「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いずれか歌を詠まざりけ

る」とはいうものの、私たちの心を深く動かすのは、単なる現在において知覚されている花鳥風月ではなく、むしろ上述のような重層的な時の経験なのではないか。本発表において、私は、そうした時間経験にもとづく私たちの感情生活の構造を、幾つかの古典的詩歌を手がかりに整理して、そこに若干の哲学的考察を加えてみることにしたい。注目しようと思うのは、万葉集にみられる「・・・見れば・・・思ほゆ」という抒情の型である。これは、正に「知覚(…見れば)」と「記憶・想起(…思ほゆ)」の重層性を表現する抒情の範型といえるように思われるが、実作に即してさらに分析するならば、大略、1)似たものによる似たものの呼び戻し、2)現前する自然の知覚による、失われた人為的秩序への追憶の触発、そして3)知覚し想起する主体の現在それ自身の夢幻性の自覚、といった三様の感情生活のかたちを、そこに区別することができるだろう。私は、それぞれの反省的屈曲の度合いの差異について考えながら、時間の経験それ自身の孕む「ニヒリズム」の根(とでもいいうるもの)へと考察を進めてみたい。

概要2. 豊澤一(人文学部教授:日本思想史)「『真暦考』の奇妙な時間」

本居宣長(1730～1801)の『真暦考』(1782成稿)は奇妙な著作である。太古の人々は経験的にずいぶんおおまかな(きはやかではなく大らかな)定めに従って暮らしていたが、実はその方が正確だ、それこそ「本当の暦＝真暦」であると言う。宣長はオランダの暦法を知悉している。一年が三六五日と三時(六時間)であること、日本における閏月設定の問題のこと等々の詳細にも通じていた。現在から見ても科学的だと言って過言ではない。

宣長は、何も科学的だと褒めて欲しいわけでは全くない。ただ日本の古典を読む過程で抱いた疑問に、長い時間をかけて解答を見出したに過ぎない。宣長は中国の暦法が日本に入ってくる以前を問題にする。そもそも中国において暦法は農作業の時期を知らせるものであった。新しい支配者は暦法を制定し、それを全土に頒布することによって、支配を確かにした。日本の太古に暦はなかった。しかし、誰も困りはしなかった。四季の移り行きを肌で感じ、周囲を見回して自然現象を観察し、それで時を決める。山ひとつ違えば、開花の時期も違うのだし、田植えの日も異なる。我が父の亡くなったのは、何年前のまさにこの木の花が開いた日であった。太古の人々は循環する季節に鋭敏な感受性を本来は有していた。植物的な感性と言ってもよい。権力者が頒布する制度としてのさかしらな暦法より余程正確である。しかし中国の暦法が渡来して、太古の人々の時間感覚が鈍り、おかしくなった。それで、作為的に設定された暦を否定するである。宣長の、例によつての漢心批判である。

現代の人々の時間・空間は、もう茫漠として、暦・時計をもって計測することなしには暮らしは成り立たない。文明化をとどめることは不可能である。宣長の言う太古の「真暦」など、望べくもない。しかし、本当にそうだろうか。宣長の発想を後ろ向きだとばかりは言えないのではなからうか。暦・時計なしの生活のすがすがしさは、何に由来するのだろうか。それは人の本来性からの呼びかけではなからうか。

概要3. 更科慎一(人文学部准教授:中国語学)「東アジアにおける異民族言語学習の歴史」

東アジア諸国には、近隣国の言語を学び合ってきた歴史がある。中国の周辺に位置するいわゆる漢字文化圏の諸国においては、もともと自らの固有の言語を表記する手段がなかったところに、それとは系統上無関係である中国語の文字(漢字)及びそれで書かれた書籍が導入された。そのうち、漢字の圧倒的影響のもと、それぞれの固有言語に基づいた書き言葉を創造する彼らの努力が実を結ぶまでの間、漢字文化圏の諸民族にとって、読み書き能力とは即ち中国語の書き言葉の能力であったのである。一方、漢語漢文の本国である中国においても、系統を異にするさまざまな民族の言語が古くから知られ、研究されてきた。中でも、明の15世紀初めには官立の外国語学校「四夷館」、「会同館」が設立され、日本語や、いまだ同定がなされていない言語をも含む十数種の異民族言語が教授されていたのである。また朝鮮でも、外交や交易の必要から近隣諸国の言語が学ばれ、官立の外国語学校「司訳院」において中国語、蒙古語、日本語、女真語(満洲語)の教育が行われていた。中国や朝鮮で使われていた異民族言語の教科書類は現在も残っており、近代以前の第二言語教育法の一部を窺い知ることができる。その多くは、現代の観点からすると素朴な、理論の裏付けに乏しいものであり、中には異言語に対する明らかに不適切な扱い(文法や語彙に対する母語の干渉など)も指摘できる。しかし、近代以前の中国と朝鮮において、それぞれ同一機関による第二言語教育のシステムが数百年にわたって続けられたことは、現代のわれわれにとっては驚くべきことである。近代的な第二言語教育はまだ、それほど長い期間の経験を蓄積していないからである。そこでは、言語の変化のために、教科書の文面や発音表記が時代と合わなくなり、改訂がなされるなど、数百年という長い時間を反映した営みが見られる。本発表では、中国の四夷館・会同館で編纂された異民族言語の教科書『華夷訳語』をとりあげ、中国人がいかにして異民族言語を学び、書記資料と現実の言語変化とのずれの問題にいかにして対応していたかという問題を、朝鮮の中国語教材との比較もまじえて考えてみたい。

概要4. 坪郷英彦(人文学部教授:民俗学)「日記を民俗学的に分析する」

民俗学の視点から近代農村の農民によって書かれた日記を取りあげます。基本的には農事の備忘録として書かれたものですが、この基本的性格に加えて様々な生活の様相を私たちに伝えてくれます。いくつかの事例を紹介し、時間の視点から分析をしていきます。手許にある資料、埼玉県秩父郡在住の大正期農村青年の日記、現在の多摩市域在住の明治期の農民日記、山口県岩国市(旧錦町)在住の昭和30年代の農家婦人の日記を取りあげます。1年の生産サイクルを示す記述内容とともに、社会的関係や個人パーソナリティに及ぶ記述も散見されます。その中ではどのような時間が読みとれるのでしょうか。